文化的翼賛に批判の眼を

大阪 S・K

「……たとえば天皇がいま病気にかかられているという、ものすごい大事な時期だと思うんです。……天皇がご病気にかかられているということういう時期に、じゃ何を言葉の書き手である僕らができるか、という大きな問いがつき刺さってくるんです。」

これは「季刊文芸、春季号・一九八八」の中の中上健次と江藤淳の対談での、中上の発言の一部である。「文学の現在」と銘打ったこの対談は緊張感も何もなく、中上と江藤のかけあい漫才ならぬ、よいしょ対談である。床屋談義以上のなにものでもない。

それはいいとしても、冒頭にあげたような発言がぽんぽんと出てくる。そして、この対談で結局主張されているのは「文学の現在」＝すなわち純文学が売れないという現状を、天皇制との関係で捉え返して突破しようということである。江藤の表現によれば「天皇における表現あらゆる共時性を吸い取りさえすれば、文学は衰退しないだろう」ということになる。

笑うまいと思う。「言葉の専門家」と称するこれらの者が、天皇が息子に出した手紙こそ素晴らしい天皇論だと褒めちぎり、天皇だけはアメリカに降伏していない、と強弁しても笑い飛ばすだけではすまないと思う。

白を黒とは言えない。だからとりあえず白を灰色ぐらいといって、それからだんだんと黒に近づけていこうというのが、江藤・中上らのやり口だ。事実この対談の中でもやっているのは、天皇は言葉の中心＝天皇との共時性の共有という、みえすいた三段論法でしかない。

この数年間、天皇制の全面的な社会的登場はすさまじいものを感じていた。今は、それを支える文化的翼賛潮流が大きく広がりつつある時期ではないかと思う。かつて宇崎竜童が「天皇はメジャーだ」と言った時は笑ったもんだったが……。

このような曲学阿世の輩に対する、きっちりとした批判を強めていく必要があると思う。

丸岡同志の逮捕を許さない

日本赤軍

一、我々日本赤軍は一一月二一日東京での警視庁公安による丸岡同志の逮捕を糾弾する。我々は、これまでもそうしてきたように、この逮捕の責任を日本帝国主義者とその手先どもに必ず取らせるだろう。

二、敵は、丸岡同志の帰国の目的を韓国大統領選、ソウル・オリンピックに対する「テロ」にあるという大宣伝を行っているが、これは日米韓極東反革命体制の強化のためにでっち上げたものである。敵が根拠としているのは、丸岡同志がソウル行きのチケットを持っていたとか、また、我々の一〇・二二国際反戦デーのメッセージで韓国問題にふれていることを論拠としているが、我々はそのメッセージのなかでも明らかにしているように、ソウル・オリンピックは、我々のような外部勢力が何かする以前に韓国人民の民主化の闘い自身によって葬りさられることは明瞭である。我々日本の革命勢力の任務は、日帝と米帝という我々自身の敵に対して闘うことをとうして、連帯することである。

韓国の民主化闘争に対して、こうしたでっち上げをもって、「テロ」を行っているのは、全独裁政権を維持させようとしているKCIA－CIA－日本公安である。

三、日本帝国主義者とその手先どもが我々を本当に恐れているのは、やつら自身が演出した我々の一〇・二二国際反戦デーのメッセージでは、公安情報を垂れ流す公安記者や評論家たちの作文をみれば、それは明らかである。

こうした作文を信じるならば、我々はパレスチナ戦場の闘いから姿を消し、消滅しているだろうし、何十回となく分裂しているだろう。そして、我々がそれに焦って、「過激行動」「テロ」を行っていたら、我々の作戦は勝利するはずもなく、それは敵が一番よく知っているところである。

やつらがこうしたでたらめを流すのは、我々の闘い、立場が人民の深層としっかり結びついているからであり、我々がパレスチナ戦場でのゆるぎない支持を受けているからである。

だからこそ、デマ宣伝を持って、より広範な人民が日本赤軍を支持することを阻止しようとしているのである。

まさに敵が我々を恐怖しているのは、我々がテロリストでないからである。

四、丸岡同志＝我々は常に同志と共にある。同志の無念を、我々は、我々のモラルと闘いで必ずはらす。

また、逮捕、がさいれなど敵による被害を受けた全ての人々に対して、我々は敵に対する断固とした報復を貫徹することによって、その責任を果たしていく。

全ての人民、同志、友人のみなさん！

敵の策謀にひるむことなく、それを打ち破る、大衆的、戦闘的な人民の闘いを共に作りあげよう。

我々はその先頭で闘いぬくことによって、被逮捕によって与えた困難を勝利の土台へと転化させていく決意である。

五、日本帝国主義者とその手先どもに警告する。どのように弾圧を強化しようとも、敗北を勝利の土台へとする我々の革命の意志と原則は、それを乗り越えていくだろう。

「てんびんばかり」って英五がうたうから
二月七日は死刑は・い・し記念日

河島英五コンサート
2月7日(日)
開場／2:00 開演／2:30
会場／豊島公会堂
（池袋駅27番 徒歩8分）

前売＝1,500円 当日＝1,700円
●お問い合せ 03(929)9971（ぐるぐる・サラダ通信）
●お問い合せ 03(929)9971（ぐるぐる・サラダ通信）
この広告を持参の方は前売で買いにします。

社説

マスコミの希望的予測は実現するのか

「豊かさ」「国際化」が共通テーマ

元日の全国紙の社説のテーマを見ると、見出しと小見出しは――

日経「国際社会での『人となり』」「国となり」」「ナショナリズムへの誘惑」「国際社会での位置感覚」

朝日「愛することのできる国に」「この寒々とした風景」「みせかけの豊かさの陰で」「『政治の時代』への自覚」「確立すべき公正の原則」

毎日「平和と繁栄の試練に挑もう――『尊敬される国を目ざして』「核軍縮による平和元年に」「孤立しては生存できない」「金もうけ一本槍でよいのか」

サンケイ「町人国家から文化国家へ、これが日本の生きる道だ」「こんな日本に誰がした」「経済大国は八方塞がり」「尊敬され愛される国家へ」

読売「平和の主役を目指す年」「ソ連軍拡競争のツケ」「米ソ協調で地域紛争抑止を」「『二国平和主義』の終わり」「国際常識に従おう」「役割果たし自己主張を」

となっている。

日本のオピニオン・リーダーを以て自認する各紙の社説の論調が、今年の日本が当面している課題と解決の指針を提示するにあたって、中曽根の戦後政治総決算路線を支持するのかしないのかで割れていた昨年からみて、区別がつきにくくなっている。

米を支えるのが日本の自己主張!?

それらの論点は米ソ協調の気運をうけて、日本経済の世界的比重の大きさに比べて相対的に小さい政治的役割をどうするのか、ヘゲモニーを喪失しつつある西側のリーダー米国との関係をどうするのか、日本国内の豊かさが抱える歪みをどうするのか、この二つにしぼられている

日経は元日の社説のなかで「この（一人当たりGNPで米国を抜いてトップに立ったことを指して）豊かさ、経済力の強さが日本の役割を従来とはがらりと変えた」という。しかし、そうだろうか。日本の豊かさは結局ドル＝米国にオンブにダッコした上での豊かさではないのか。日本の対外支払準備資産は八〇〇億ドルを超えた。そのほとんどはドルで金や他の国の通貨は皆無に近い。

ドルが目減りするにつれて、国の準備資産も目減りしている。読売の社説は、日本の自己主張とは米国を支えることだ、と名言（?）をはいたが、この状況を認めたものだ。しかしこれは破滅への道だ。軍拡競争という遊びに金を注ぎ込んで財産を使いはたした放蕩親父に、息子が追い銭をくれてやるようなものだ。とんだ盟友があったものである。

新型間接税で豊かになるのは誰か?

日本は豊かになったと皆書いている。朝日が指摘するように、豊かさのなかで進む不公平がある。が、どうしてこうも暮らしにゆとりがないのか。労働時間の短縮が長年叫ばれながら、どうしていつまでも実現しないのか。こう長い時間働かなくては食べていけないのか。農家は一家離れねばなれの出稼ぎをしなければ食べていけないのか。

そのうえ竹下政権は新型間接税の創設を今年から来春にかけての最大の課題に掲げている。その理由は法人税を減税し、軍備拡張のために財政制度上の保証を確立するためである。

これで日本人がどうして豊かになれるのか、全国紙の編集者に教えて欲しいものである。新型間接税がどんな形になるにせよ、最終的に負担するのは消費者だ。金持ちには薄く貧乏人には厚い逆累進課税になる。これを所得税減税で調整するというが、所得税さえ払えない貧乏人はどうなるのか。新型間接税の導入とは、政治から見放された貧乏人を作るということだ。

彼らの書いた処方箋通りに日本が進めば、日本は世界から信頼を失い、ますます軽んぜられ、国内では豊かになるどころか貧乏人が増えますます貧乏になっていくほかないのだろう。

訴える

▼出力調整実験の中止を求める緊急署名を集めています！

この2月に四国の伊方原子力発電所で出力調整の実験が行われようとしています。この実験でソ連のチェルノブイリ原発は事故をおこしました。原発では出力を短時間で上げ下げすることは危険です。1週間から10日も必要とする出力調整を、この実験では無謀にも1時間でやろうとしています。

四国電力と伊方原子力発電所に対して、この実験の中止をもとめる署名を集めています。1月25日には集約して、四国電力と直接交渉をします。

問合＝グループ「原発なしで暮らしたい」、別府市東荘園町1－1、小原方

▼伊方原発における2月の出力調整実験をやめさせる緊急行動

1月24日（日）午後8時、別府観光港集合（関西汽船乗場前）、出港9時／25日（月）午前7時高松港着、10時港傍の陸運局跡地に集合、10時半から高松市内をデモして四電本社へ

▼赤堀さんの再審公判

1月25（月）、26日（日）とも午前10時／静岡地裁

▼水車村のいろりばた懇談会

車むら（静岡県藤枝市滝の谷、東海道線藤枝から瀬戸線バス不動峠入口徒歩30分）／小笠原寛（岩手県山形村々長）／1泊3食つき3500円くらい、1週間前に申し込みのこと／申込＝0422－43－3285（自宅）03－501－4307（職場）中島まさる

▼宮城三里塚年休裁判仙台地裁判決公判

1月27日（水）午後1時15分／仙台地裁／同日午後6時～報告集会、国労会館

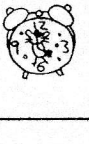
の世界、わっぱ支援、講演とコンサートの集い

1月24日（日）午後1時半～6時／名古屋市公会堂大ホール（地下鉄・JR鶴舞）／講演、野坂昭如「当節政治風俗文化事情」／前売2500円／問合＝わっぱの会、☎052－822－3958

パンフ紹介

▼皇族警備で何がおきたか2、総集編「象徴と力」

執筆者＝照屋寛徳、池宮城紀夫、三宅俊司、村椿嘉信、新崎盛暉ほか／B5版、117頁、700円（送料別）、申込＝天皇来沖に伴う過剰警備110番、那覇市楚辺1－2－67、すぐるビル2F、三宅俊司法律事務所気付

▼報道追随型裁判を闘う！三浦和義支援通信

年3600円／申込＝東京都渋谷区桜丘町16－15－703、竹内オフィス、郵便振替東京5－176778